
矢作川下流低地における完新世後半の古環境変化

川瀬久美子

中部日本の矢作川下流低地において、縄文海進のおよんだ地域を対象として、ボーリング資料の整理、加速器質量分析計による堆積物の¹⁴C年代値の測定、珪藻分析を行い、完新世後半の低地の地形環境の変化を明らかにした。表層地質の整理から、沖積層上部砂層の上位に腐植物混じりの後背湿地堆積物が堆積し、洪水氾濫堆積物と考えられる砂層によって覆われていることが明らかとなった。後背湿地堆積物を覆う砂層は、支流沿いでは自然堤防を構成している。堆積物の珪藻分析結果は、後背湿地堆積物が安定した止水環境で堆積し、その上位は流水の影響が強まったことを示唆しており、堆積物からみた堆積環境の変遷を支持している。静穏な環境から河成作用が卓越する環境への変化は、約2,000年前におこった。本研究で推定された上記の環境変化が、対象地域の上流部においてもみられたことが従来の研究で指摘されている。それらによれば、約2,000年前頃から洪水氾濫の影響が強くなり、古墳時代には顕著な自然堤防が形成されるようになった。この一連の堆積環境の変化には、気候の湿潤化による洪水氾濫の激化と、人為的な森林破壊による土砂供給量の増大が関与している可能性がある。

名古屋大学大学院文学研究科
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
Nagoya Univ.
Furoucho, Chikusa, Nagoya, Aichi, 464-8601 Japan